

■ 開拓とともに幕が開いた北見薄荷の歴史

北見薄荷産業の最盛期は、昭和14年(1939)で作付面積2万ha、薄荷脳(結晶)と薄荷油を合わせて336トンを輸出し、実に世界の70%を北見地方の薄荷栽培で占められていました。

情報化が進んだ現在では、一地方が一作物で世界を席卷することなど考えられないことで、観光客の北見市のイメージも「ハッカ」となっています。

ハッカ栽培は明治29年(1896)、当時の薬種商、渡邊精司が旭川市永山からハッカの種根を取り寄せ栽培したことに始まります。

明治30年(1897)湧別の小山田利七が故郷山形から種根を取り寄せ栽培し、2年後の明治32年に山形から持ち帰った天水釜を用いて蒸溜したことが、薄荷蒸溜の始まりです。(初めの蒸溜者については種々の説があります。)

薄荷蒸溜は乾燥させた葉を釜に入れ、水蒸気で蒸すと香り成分を含む油と水の混合気ができ、それを冷却すると比重の差から油と水に分離する作業でできた油を「取卸油(とりおろしあぶら)」といい、とても高価な物でした。

北光社や屯田兵が北見に入植した明治34年(1901)以降、開拓農家の副業として、高額な収入になる薄荷栽培が盛んになり、瞬く間に北見地方の主要農作物の地位を占めるようになっていきます。

薄荷栽培初期、取卸油は本州の薄荷商人の所まで持参したり輸送したりしていましたが、明治40年(1907)頃からは薄荷商人は当地方の農家へ直接買い付けるようになり、作付面積の拡大に合わせ、取卸油の採油量も増えていきました。

採油量を増加させたのは、明治33年頃大西松太郎が乾燥させるために考えた「ハサ掛け(木枠に薄荷草を掛けて乾燥させる)」により、余分な水分がなくなり採油量の増加となりますが、現在で言う低燃費で高出力と言えます。

明治37年(1907)に日露戦争が勃発、屯田兵や農村から多くの青年男子が出兵し、働き盛りの手が減少したにも係らず薄荷の作付面積は増えていきます。

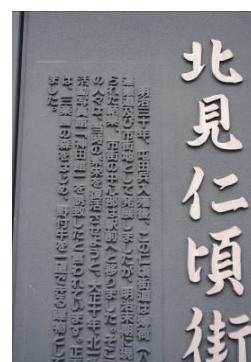
これらの背景には、北見地方の自然条件が薄荷栽培育成に適していたこと、大豆や小麦に比べ7倍以上も高値であったこと、「薄い」「荷」と書くように「取卸油」はコンパクトで運び易く低運賃で済んだことと、蒸溜後の薄荷草が馬の飼料や畑の肥料に最適だったことなどがあり、農家にとっては利点の多い換金作物であったことで、一大生産地として形づくられました。



▲田中式蒸溜釜を使い取卸油作業風景



▲ハサ掛け作業風景



▲東5丁目仁頃街道にある史文成田山真隆寺前の2ヶ所にある